

図書ニュース

大阪府立北野高等学校図書館 第5号 2012.12.14 発行

日本最大の書店はどこ？ 答えはアマゾン書店です。年商約 2000 億円は、業界の売り上げの 1 割，大型店舗をかまえる 2 位・紀伊國屋書店の約 2 倍，6 位・ジュンク堂書店の約 4 倍にあたります。それでも，アマゾンはシェア 2 割が目標で，本好きの国民性のある日本には，まだまだビジネスチャンスがあるといえます。

しかし，本の場合はネット通販よりも，書店や図書館にいった書架から本を探し，実際に手にとってみて買う（借りる）ことをお勧めします。すると，クールで繊細な日本の書籍文化が感じられます。衝動に駆られて買って（借りて）しまったのであればそれもまたいい。予期せぬ収穫や新たな発見に出会え，得をした気分になれるでしょう。日々忙しい北野生ですが，たまには本探しに書店や図書館に出かけてみてはどうですか。

以下，今回は，本校図書館にある新着図書の中で，自分が「衝動借り」をした本を中心に紹介します。図書館には年に何回か，新しい本がどっと入ってきます。その中には，興味をそそられるものが必ずあると思います。お楽しみに。

①「グリーン経済最前線」

井田徹治，末吉竹次郎著 岩波新書（519／15／1）

最近，「グリーン経済」，「グリーン・ニューディール」などの言葉がよく使われます。「グリーン（緑色）」は環境への負荷が少ないという意味で，反対語は「ブラウン（茶色）経済」です。つまり，自然保護，省エネ，新エネルギーの開発，貧困から脱するための融資などを推進していく新しい経済システムを構築しようという考え方です。そして，この考えに立つと，環境保護と経済成長は両立できることになり，かつての成長神話が忘れられない人々も，耳を傾けるかもしれません。この本では，世界のさまざまな取り組みが紹介されていますが，「グリーン経済」の分野でも，すでに各国の競争が始まっていることがわかります。

このほかにも，図書館には「グリーン・エコノミー」（吉田文和著・中公新書・

503/Y2/1)や「グリーン資本主義」(佐和隆光著・岩波新書・331/S16/3)などの新書があります。前者は脱原発と地球温暖化の問題を中心に、後者は環境保護と経済成長の基本的な考え方を述べています。特に昨今の市場主義の台頭を批判してきた経済学者の佐和隆光さんは、「グリーン資本主義」を21世紀の資本主義革命ととらえています。一度読んでみてはどうでしょうか。

②「方言コスプレ」

田中ゆかり著 岩波書店(818/T6/1)

名古屋へ行って名古屋弁を聞くと、「どえりゃあことだねえ」としゃべりたくなるし、福岡へ行って博多弁と聞くと、「どげんしたと」とつぶやいてしまう。テレビドラマを見ると、なぜか、龍馬のことは(高知弁)や島人^{しまんちゆう}のことは(ウチナーグチ)がうつってしまう。そんな経験はありませんか。

この本は、その地方出身でない人が、その地方の方言を使うという昨今の奇妙な現象から、新しい方言文化を考えてみようというもの。大した問題ではないかもしれませんが、これまでありがちだった「方言をネガティブにとらえる」ところが全くないのが、新鮮に感じられます。

「ニセ方言」として使われた頻度が最も高いのは、やはり大阪弁。そして、他の地方からみた大阪弁のイメージは、予想どおり「おもしろい」です。何気ない日常会話の中でも、なぜか笑いをとろうとしてしまう。それは大阪人の宿命なのかもしれませんね。

③「昭和の大阪」

産経新聞社 光村推古書院(216/S22/1)

昭和の時代は、1926(昭和元)年から1989(昭和64)年までと長かった。この間、太平洋戦争や高度経済成長もあり、日本の風景の変わり様は驚くべきものがあります。この写真集は、特に昭和20年(終戦)～昭和50年(オイルショック後)の、最もコアな昭和の風景を写しています。

こういった写真は、当然、見る世代によって感じ方が違うでしょう。自分たちの世代にとっては懐かしく、心の中の「原風景」を呼び戻してくれる写真が多いのですが、生徒のみなさんにとっては歴史の資料集のように感じるかも知れません。しかし、「(自衛隊の前身である)保安隊の御堂筋行進」などを見ていると、到底、いまの日本と同じ国とは思えない。隔世の感があります。

④「深海と深海生物－美しき神秘の世界」

海洋研究開発機構（監修） ナツメ社（452／K6／1）

図鑑タイプの書籍で、さまざまな図や写真で飾られた紙面が美しい。前半は地学や地理学的内容で海、深海、深海底のはなし。後半はまさに深海生物の図鑑です（面白い顔(?)の魚がたくさん出てきます）。

深海底は大陸棚の外側の海域をさし、国際法上は人類の共有財産です。深海底の地形は、溝あり嶺あり平原あり火山ありで、これもまた面白い。また、海洋深層水、メタンハイグレードなど、私たちがよく耳にする有用物も出てきます。

専門的知識のない自分はこれ以上解説できませんが、「海の底」という未知の世界の、雑学がたくさん載っていて、とても楽しい本だと思います。

⑤「モラルのある人は、そんなことはしない」

アクセル・カーン著 トランスビュー発行（490／K10／1）

この本は、生命倫理（バイオエシックス）に関する問題－たとえば、着床前遺伝子検査、代理母出産、クローン胚、DNA 鑑定、安楽死の問題などの是非を考えるものです。筆者はフランス人で、臨床医を経て遺伝学者となり、現在はパリ第5大学の学長という立場です。進歩する科学技術が、生命操作に応用されてエスカレートしていく。それに対して筆者は、倫理的に「そこまでしてはならない」という反論をする。そして、その反論の考察がさまざまな視点からなされているのが、この本の特徴です。「理性的かつ人間的であれ」という筆者の父の遺言が、その出発点にあるようです。

医療に関わる分野で、法や倫理の重要性は高まっています。将来、医療や生命研究に携わろうという人には、ぜひ読んでみてほしい1冊です。

⑥「ウッドストックへの道」

マイケル・ラングス著 小学館（764／L1／1）

ウッドストックは、ニューヨーク郊外の田舎町。ここの個人農場で、1969 年8月15日～17日（実際は18日朝まで）、伝説のフォーク・ロック・イベントが開かれました。集まった観客は、40万人とも50万人とも言われ、あのジミ・ヘンドリクスが伝説のギター（アメリカ国家）を弾いたのはこのとき。また、ジョニ・ミッチェルという歌手が、のちにこのときの栄光を華やかに歌っていました。この本

は、「ウッドストック・フェスティバル」を企画、運営した 24 歳の若者の 40 年後の回顧録です。

その後、ロックは商業主義化してしまい、アメリカ社会は退廃し(?), 自信を失っていく。そして、ベトナム戦争終結後の 1976 年に、イーグルスというグループがホテル・カリフォルニアという歌を出して一世を風靡します。その中に、Wine = Spirit (酒) を注文した客に、ホテルマンがそんな Spirit (魂) は 1969 年以来もっていないーという歌詞が出てくるのですが、アメリカ (の若者文化) は、ウッドストック以来、魂を失ってしまったというのです。やはり、ロックにとって 1969 年は特別な年なのでしょう。

1950 年代～60 年代のアメリカの若者を中心とする文化を、カウンターカルチャー (対抗文化) と呼ぶことがあり、その中にはヒッピーやドラッグの文化も含まれています。ウッドストックは、最後のカウンターカルチャーだったのか。そんな文化の歴史に思いをはせながら、読んでみるのもよい。このフェスティバルの DVD (映画) が見たくなるかもしれません。